

校内別室で登校のリズムをつくり、自信がもてるようにする

不登校児童の状況

対象児童は、教室に入ってみんなと一緒に学習することが難しく、授業中に廊下に出てしまうことがある。また、欠席が続いてしまうことがある。

具体的な取組

○リラックスできる環境づくり

校内の教育相談室を校内別室とした。児童が他の児童を気にせず過ごせるように、個室を準備した。ぬいぐるみやソファがあるスペースをつくり、利用する児童がリラックスして、過ごすことができるようにした。



○校内別室の複数設置

オープンスペースにも、校内別室を配置した。教室の様子が聞こえたり、雰囲気を感じられたりするため、教室に戻って学習できそうな場面では、みんなと一緒に学習できるようにした。



○児童館との連携

家の外に出る、登校するという生活のリズムをつくるために、登校しなくても、学区の児童館に登校してもよいことにした。その際、別室の支援員が児童に付き添ってもらうことにした。

また、放課後登校も促し、担任との信頼関係を築いた。

○安心できる居場所

校内別室では、支援者と一緒に、自分ができること、活動したいことに取り組み、安心できる居場所にした。



成果

校内別室や児童館での学習、または放課後登校など、登校の方法を選択できるようにして、それぞれの児童に合った学校とのつながりを通して、学びを継続することができるようになった。

課題

登校が継続するためには、学習の保障が大切で、どのように学習をフォローしていくか検討する必要がある。

不登校児童の登校再開への支援について

不登校児童の状況

対象児童は、小学校 6 年生である。4 月に転入してきたが、4 月途中から登校を渋り始め、4 月後半から 1 学期中は登校しなかった。2 学期になって心境の変化があり、保健室や校内別室なら登校できるかもしれないとのことで、当該児童の希望を聞いて無理のない範囲で登校している。

具体的な取組

○居場所の提供

安心して登校できる居場所の提供を目指し、校内別室に登校を始めたが、当該児童の希望で、基本的に保健室で過ごすことにした。保健室利用について他の児童の理解を得られるよう養護教諭が適宜説明し、利用者が複数いる場合は席の配置や課題等に配慮している。

○学習支援

校内別室支援員と、週 1 時間程度算数を学年の進度に合わせて学習している。また、外国語担当が毎日プリントを準備し、国語や理科担当もタブレットで取り組める課題を出す等、当該児童が興味をもって課題を選べるよう工夫している。家庭科は保健室で指導を受け、裁縫に取り組んだ。

○教職員・友人との関わり

保健室や職員室で会った際、教職員は積極的に声をかけている。興味がある学習は、事前に教員同士で連絡を取り、友人に誘いに来てもらい参加できることもある。給食も、仲の良い友人が届けてくれ、少し会話したり、学習の見通しを教えてもらったりするようにしている。

○他学年との関わり

支援員が数名を見ることもあるため、当該児童と他学年の児童が共にゲームや制作を楽しむ時間がある。下学年の児童には上級生としての役割を担うこともある。



成果

遅刻・早退・欠席はあるものの、登校して過ごせる場所ができた。体育学習発表会や展覧会には参加でき、当該児童が達成感を感じる場面があった。関係機関とも連携し情報共有できており、当該児童も支援する教職員との関係は概ね良い。

課題

- ・保健室での過ごし方
- ・教室復帰に抵抗感が強い
- ・中学校との連携

校内別室指導について

不登校生徒の状況

対象生徒は、小学校のときに保健室登校になった。中学校に入って 6 月後半から不登校状態になり、夏季休業明けから校内別室の活用を始め、2 学期からは週 2 日登校、3 学期は週 3 日、2 年生は週 4 日、3 年生になってからは週 5 日と登校日数を増やしている。現在は行事や総合・学活・道德・給食の時間は教室復帰ができています。

具体的な取組

○個別の学習支援

当該生徒が教室で授業を受けることが難しい場合、別室で教科担当が出す課題や生徒持参の課題に取り組めるようにしている。取り組む学習内容については、生徒が自ら決定し、必要に応じて支援員が学習支援を行っている。

○行事における役割

校内別室を利用している生徒に行事で役割を与えることで、行事に参加するきっかけになるようにした。

具体的には、体育大会時に救護係の役割を与え、行事中は他の生徒とは別の場所で過ごすことができるようにした。

○学級との関わりの維持

1 年生の頃から、1 日を通して校内別室で学習に取り組むことができた日でも、給食の時間は学級で過ごすようにしていた。

2 年生の頃からは少しずつ行事への参加もできるようになり、3 年生からは総合・学活・道德は、教室で授業を受けることができるようになっている。

○SC・学びの教室との併用

SC との面談（週 1 回・1 時間程度）や生徒によって特別支援教室も併せて利用している。自己理解、行動の調整、心理的な安定などに向けて、SC や通級指導員とも連携して本人の成長を支えている。



成果

校内別室を活用して、教室に入りづらいと感じている生徒への別室支援を行うことで、登校できない状態から、徐々に登校日数を増やし、教室復帰できる機会が増えていった。教室に入れなくても、登校のリズムを作ることができている。

課題

教室に比べて教員や友人と関わる機会が少ない。校内別室日誌で担任とのやりとりはあるが、直接教員と関わる時間も増やしたい。

教室、担任、友達とつなげる役割を担う校内別室指導支援員

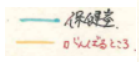
不登校児童の状況

対象児童は、小学校 2 年生の頃から、「教室がうるさい」、「嫌なことをしてくる友達がいる」等の理由から登校しぶりが始まった。3 年生になり、欠席が続いたところ、保健室登校となった。学力が高く、教室の授業がつまらないという思いや、音への過敏さも欠席の要因の一つと考えられる。

具体的な取組

○見通しをもたせる支援

担任から 1 週間ごとの時間割をもらい、毎朝、養護教諭が「どの授業に出られそうか」と当該児童に尋ね、持ち物や、不安なことがないかについて丁寧に確認した。



	11日(月)	12日(火)	13日(水)	14日(木)	15日(金)
1	朝礼(出席者)	朝礼(出席者)	朝礼(出席者)	朝礼(出席者)	朝礼(出席者)
2	国語(出席者)	国語(出席者)	国語(出席者)	国語(出席者)	国語(出席者)
3	算数(出席者)	算数(出席者)	算数(出席者)	算数(出席者)	算数(出席者)
4	理科(出席者)	理科(出席者)	理科(出席者)	理科(出席者)	理科(出席者)
5	体育(出席者)	体育(出席者)	体育(出席者)	体育(出席者)	体育(出席者)
6	音楽(出席者)	音楽(出席者)	音楽(出席者)	音楽(出席者)	音楽(出席者)
7	図工(出席者)	図工(出席者)	図工(出席者)	図工(出席者)	図工(出席者)
8	家庭科(出席者)	家庭科(出席者)	家庭科(出席者)	家庭科(出席者)	家庭科(出席者)
9	英語(出席者)	英語(出席者)	英語(出席者)	英語(出席者)	英語(出席者)
10	総合(出席者)	総合(出席者)	総合(出席者)	総合(出席者)	総合(出席者)
11	道徳(出席者)	道徳(出席者)	道徳(出席者)	道徳(出席者)	道徳(出席者)
12	保健室(出席者)	保健室(出席者)	保健室(出席者)	保健室(出席者)	保健室(出席者)
13	特別活動(出席者)	特別活動(出席者)	特別活動(出席者)	特別活動(出席者)	特別活動(出席者)
14	学校行事(出席者)	学校行事(出席者)	学校行事(出席者)	学校行事(出席者)	学校行事(出席者)
15	その他(出席者)	その他(出席者)	その他(出席者)	その他(出席者)	その他(出席者)

○在籍学級の児童との交流

休み時間に、担任が、当該児童と仲の良い友達と一緒に、簡単にできるカードゲームを持って保健室に来る等、学級の児童との交流をもてるようにした。

それ以降、休み時間ごとに学級の児童が遊びに来るようになり、休み時間に友達と遊ぶことで、教室復帰に向け、学級への所属感が高まった。

○支援員の付き添い

不安がある授業のときや、足取りが重いときは、校内別室指導支援員が付き添い、教室まで送ったり、廊下で一緒に授業を聞いたりする。また、教室での授業参加が難しい場合は、養護教諭と共に、校内別室指導支援員と、保健室で教室と同じ内容の学習を行うようにしている。

○支援員との情報共有

校内別室指導支援員の出勤日には、教育相談コーディネーターとのミーティングを毎回実施している。児童の様子の変化や寄り添い方の注意事項、その日の学校行事等の予定、S Cや保護者からの伝達事項等の確認を行い、全教職員が同じスタンスで支援に当たることができるよう打合せを行っている。

成果

担任や養護教諭だけでなく、支援員が寄り添うことで、人間関係のつながりができ、特定の教職員との対応のみという状況にならず、安心して過ごすことができた。そのため、3 人の児童の欠席日数の減少、授業参加時間の増加が見られた。

課題

支援員の人数が増え、連絡、調整、育成を担う教員が不可欠となるため校内体制の整備が必要である。

児童が立てる一日の予定で前向きな気持ちに

不登校児童の状況

対象児童は、小学校 4 年生で、3 年生の時に不登校となり、教育支援センターに通い始める。4 年生になって、継続して教育支援センターに通っていた。年度の途中から校内別室に通うようになった。現在、登校支援を受けながらほぼ毎日別室に登校できている。

具体的な取組

○支援シートの活用

当該児童の思いや保護者の願いを確認するために家庭に記入を依頼している。記入が難しい場合は、面談を行った時の内容を踏まえて、学校側で作成することもある。支援シートの内容を基に、支援計画を作成している。

○定期的な支援会議

参加者は、管理職・教育相談コーディネーター・養護教諭・担任・別室支援員で、2 か月に 1 回のペースで開催し、必要ときにはその都度開催している。児童の状態の共有と支援計画についての検討を行っている。内容により S C や S S W 等も参加している。

○在籍学級とのつながり

当該児童にとって負担がない範囲で担任やクラスの友達が別室を訪れ、声かけを行う。

担任からは、今後の予定や学校行事について、児童が見通しをもてるように話をしていくことを心がけている。

○自ら立てる 1 日の予定

当該児童は前日か当日の朝に支援員と共に、クラスの時間割を確認しながら、一日の予定を立てるようにしている。

予定を常に自分で確認できるようなボードを用意し、在籍学級への参加を促している。



成果

当該児童は、4 月～7 月の登校日数は 1 日だったが、9 月～11 月の登校日数は 47 日と増えた。見通しをもてるようにすること、自分の行動を決められるようにすることで、学校へ登校できるようになり、教室での授業にも参加できるようになってきた。

課題

声かけをする適切なタイミングや情報の共有を基にした校内の支援方法の共通認識が必要である。

校内適応指導教室について

不登校生徒の状況

小学校の頃から不安定な登校状況の生徒であった。対人恐怖症や情緒不安定等、生徒自身に特別な教育的ニーズがあって、教室での一斉授業に適応できなくなったと考えられる。

具体的な取組

○校内別室でのオンライン授業

旧 P C 室を改装して設置した校内別室を利用している。オンライン授業により、教室での授業をリモートで視聴することも可能。

体育の授業も配信している。



○面談や生活記録の交換

担任や校内別室支援員が、当該生徒と面談や生活記録の交換の機会を多くもち、活動について賞讃することにより自己肯定感や自己有用感の醸成を図っている。当該生徒にも運動や学習も含め、状況に応じた様々な活動を用意している。

○外部機関との連携強化

S C、S S W、子ども家庭支援センター、心療内科等、外部機関との連携を強化している。保護者との電話連絡や面談はもちろんのこと、対応する教職員の指導力向上のための研修を実施している。

○関係教職員の情報共有

週 1 時間、特別支援教育コーディネーター、教育相談コーディネーター、管理職、各学年担当、養護教諭、校内適応指導教室職員で、情報交換、対応の確認を行っている。また、校内別室を利用している生徒の保護者会を実施している。

成果

当該生徒は、登校することができずにいたが、校内別室を利用したことにより、登校だけでなく取り組む内容の選択肢が増えた。当該生徒の短期長期の目標設定が可能にもなった。実際に登校できる日数も増加し、別室登校をするだけでなく、学級への参加も徐々にできるようになってきた。また、校内研修の充実により、教職員の当該生徒に寄り添うカウンセリング力が向上して、校内体制の強化が図られた。

課題

校内別室に登校している生徒の大半は、他の生徒とも教室で一斉授業を受けたいとの願望がある。一時避難、居場所の提供はできているため、教室に戻る際のスモールステップを踏ませる手だての整備が必要である。

地域人材を活用した校内別室の取組について

不登校児童の状況

対象児童は、入学時から、集団の中で生活することや、初めてのことに見通しがもてないことに強い不安を感じ、登校を渋るようになった。また、集団の関わりを苦手とし、教室への入室も拒むようになってきた。

具体的な取組

○地域人材を活用した校内別室の利用

当該児童は、集団での活動に抵抗感があるため、安心して過ごせる場としての校内別室を利用した。地域のネットワークを生かし、民生児童委員等が支援員として別室利用の児童の指導に当たっている。

○個別学習の時間の設定

校内別室にて、民生委員を中心とした地域人材に見守られて、課題のプリントや読書等に取り組んでいる。



○人間関係力（関わり合いのスキル）の向上

校内別室を利用している複数の児童や支援員と共に、関わりが必要なゲーム等を通して、人間関係力の向上を図っている。



○在籍学級とのつながりの維持

毎朝、教室へ行き、担任と挨拶やその日の予定を確認している。参加できそうな学習や行事にはその都度相談し、当該児童の意思を尊重しながら確認をしている。また、担任は、空き時間に校内別室に行き、当該児童とのつながりを築いている。

成果

当該児童は、校内別室を利用することで、欠席することが減った。登校後に教室へ行き、担任と挨拶をしたり、一日の予定を相談できるようになったりした。担任と相談して、校内別室と教室を併用し、安定して登校することができている。

課題

担任と保護者の連携を深め、当該児童が一日の予定を立てて、安心して教室で過ごせる時間が多くなるようにしていく。

校内別室登校支援員を活用した生徒支援について

不登校生徒の状況

対象生徒は衝動性が強く、相手の気持ちを押し量ることが苦手で、他者と関わることに困難さを感じているため、学年が上がるにつれて、集団の中に入ることが難しくなっていた。現在は校内別室を中心に登校し、校内別室指導支援員や教員と関わる中で登校意欲が高まりつつある。

具体的な取組

○校内別室指導支援員の取組

校内別室指導支援員を活用して、別室登校を組織的に実施している。支援員は、1日の活動内容を報告書に記入するようにし、作成した報告書は校務支援システムを活用して全教員へ配信している。これにより、全教員が別室における当該生徒の情報を共有しているため、当該生徒の状況に合った適切な支援を組織的に行うことができている。

○校内別室の環境整備

パーティションで区切り、個別の空間を確保している。

また、リラックスできる空間を確保している。



○各委員会での取組

週1回、「特別支援教育校内委員会」(管理職、養護教諭、生活指導主任、特別支援教育教育コーディネーター、各学年教員、特別支援教室専門員、学習支援教員、巡回指導教員が出席)を開催し、当該生徒の現状について把握するとともに具体的な対応について協議している。また月1回の「いじめ不登校対策委員会」においても情報を共有し、全校体制で当該生徒の支援に当たっている。

○校内研修の充実

生徒理解研修では、担任から当該生徒の様子を詳細に報告した。また学級満足度調査活用研修では、講師を招聘してよりよい学級経営と生徒支援のために、データをどう活用するかについて知識を深めた。

成果

組織的に対応することで、当該生徒の状況を多角的・多面的に理解することができた。また、個別対応や少人数による指導等により、時間をかけて当該生徒と向き合うことを通して、登校意欲を高めることができた。

課題

- ・年間を通した支援員の確保
- ・将来的に見通しをもてるようにする指導の充実

校内別室指導について

不登校生徒の状況

対象生徒は、小学校から不登校傾向があった。中学校入学後、数週間は頑張って登校していたが、その後は、週1日程度、プリントを取りに登校する状況となった。現在、2年生であるが、今年度は、週1日の校内別室には、ほぼ毎日登校する状況となり、行事やその事前学習等について教室で学ぶ場面も見られるようになった。

具体的な取組

○大学生ボランティア

今年度は、週1日、午前中に大学生ボランティアの協力で、別室指導を行っている。担任や学年担当も、登校の際には、必ず、コミュニケーションを取るように努めている。別室での活動や本人の様子などは、ボランティアの方による、記録ノートを通じて、状況を共有し生徒の様子を把握するようにしている。

○別室の利用状況

今年度の不登校傾向の生徒の状況は、時々登校したときには、抵抗なく教室での活動ができる生徒がほとんどであるのが特徴である。そのため、別室を定期的に利用している生徒は1人となっている。まったく登校のない生徒には、別室の存在を周知しているが、今のところ、利用の意思を示す生徒はいない。

○別室における活動内容

具体的な活動としては、ボードゲームなどを通じてボランティアの方とのコミュニケーションを深めたり、ワークや授業プリントについてサポートを受けながら取り組んだりして過ごしている。

○学級との連携

各教科の提出物などを、別室登校の時間を活用して仕上げたり、試験勉強に取り組んだりすることがある。



成果

別室登校の利用があることで、定期的に学校に来ることができ、担任との人間関係も構築することができている。また、ボランティアの方との相性も良く、前向きな気持ちで、登校していることが感じ取れる。

課題

行事の事前学習には参加できたが、日常の教室復帰はなかなか見えてこないのが現状である。慎重に進める必要がある。

不登校児童の登校支援について

不登校児童の状況

対象児童は、全く登校できないわけではなく、登校できる日は教室に入り授業を受けることもある。当該児童の状況に応じて担任が個別の対応をしている。また、家庭と担任が密に連絡を取り合い、保護者からの情報を踏まえて対応をしている。

具体的な取組

○オンラインの授業配信

登校することができない日や教室へ入ることができない日でも、授業を受けることができるようにするため、保護者と連絡・調整の上、タブレット端末を使用し、オンライン授業を配信している。

○外部機関との連携

S Cや特別支援教育コーディネーター、特別支援教室専門員、管理職がS S W、医療機関等、関係機関と当該児童や保護者をつなげている。

○別室対応

当該児童が教室に入りづらい場合は、保健室やカウンセラールームにて、養護教諭や支援員等が対応し、会話をしたり個別学習に取り組んだりしている。登校して教室に入り、その後、別室対応して、また教室に戻るという別室利用も行っている。



○ボランティアの配置

当該児童が、集団の中で自信をもてるようにするため、教室内にマンツーマンで指導できる学習支援ボランティアを配置している。児童の困り感を解消して、集団になじんでいけるよう対応している。



成果

校内不登校対策委員会での協議を基に、当該児童への支援の仕方を検討し、実行することで、当該児童や保護者が学校の提案した支援内容を選択することができ、当該児童の気持ちを踏まえた生活となり、教室復帰に向けた取組になっている。

課題

当該児童の自己肯定感や自尊感情を高めるための教員の声かけや、当該児童の家族との連携の強化を検討することが必要である。

不登校児童に対する校内別室指導支援員の関わりについて

不登校児童の状況

対象児童は小学校 5 年生の児童である。小学校 4 年生の 10 月頃に病欠で 1 週間程欠席したことをきっかけに学校に来られない、教室に入れない状況になった。保護者は、当該児童が登校できれば、教室に入れなくてもよいと考えている。登校した時には、空き教室や校長室などで担任から提示された課題に取り組んでいる。

具体的な取組

○支援員による児童理解

校内別室指導は毎週金曜日に開室していて、毎回 3 人～5 人の支援員が指導に当たっている。地域の子育て N P O の方々と連携しているので利用する児童一人一人のことをよく理解してくれている。



○地域の子育て N P O との連携

校内別室の取組を始める前から区の援助を受けて、教室に入れない児童のための居場所を、地域の子育て N P O と連携して行っていた。当該児童も関わっていたので、今年度も引き続き校内別室に登校している。支援員との人間関係もできているので、毎週金曜日は楽しく過ごすことができている。

○指導内容の共有

年度当初は校内別室指導のある金曜日しか登校できていなかったが、リズムができて、他の曜日にも登校できるようになった。校内別室指導の支援員と連携を図り、指導内容を校内で共有して、他の曜日の指導にも生かすようにしている。

○長期休業中の支援

連携している地域の子育て N P O は、子ども食堂や、学習支援が必要な児童のための無料の学習塾を行っている。当該児童も学習や生活リズムが乱れがちな夏休みには、この塾に行って学習を進めることができた。

成果

当該児童は、校内別室指導により、今年度は学校に来るリズムができている。学校だけでなく、学校外での学習サポートも受けられているので、基礎的な学習の支援の機会もつくることができた。

課題

当該児童については成果が見られたが、まだ校内別室指導に来られていない児童の対応を工夫していかなければならない。

不登校児童の対応について

不登校児童の状況

対象児童は、小学校 6 年生で、1 年生から不登校であった。当時の要因の一つは、学校の担任から保健室に行くことを止められたことである。知能検査によると、学力が低いという結果が出ていた。2 年生以降は、気持ちの浮き沈みがあり、登校できているときもあった。現在は、週 1 日程度登校している。

具体的な取組

○個別の取り出し学習

学習支援員による、個別の取り出し学習を進めた。これにより当該児童が学習に取り組むようになり、登校の意欲につながっている。学習支援員と当該児童や保護者との関係は良好であり、学習支援の際には安心して登校できるようになっている。今後も継続していく。

○ＳＣとの連携

今年度から新しく配置されたＳＣとつながり、1 か月に 1 回程度、当該児童や保護者がカウンセリングを受けている。ＳＣ面談の前は、保護者との関係がよくなかったが、このカウンセリングを受けることによって、保護者の考えが変わり、良好な関係を築くことができています。

○支援を充実させるための情報共有

当該児童の別室登校時には、養護教諭等と当該児童が話をしている。当該児童が好きなことや、最近の体調、家での様子等について聞き、管理職、担任、特別支援教育専門員等と情報共有し、不登校支援に生かしている。



○臨床心理士によるカウンセリング

当該児童は、臨床心理士ともカウンセリングを実施している。当初は、初対面で緊張しがちであったが、粘り強い声かけにより、関係づくりを進めている。最近は、徐々に関係ができてつつある。今後も継続していくことにより、登校することにつながっていきたいと考えています。

成果

- ・チームで対応していくことによって、同じ方針で対応を当該児童に対して行うことができ、児童の心の安定感にもつながった。
- ・居場所をつくることで、児童が登校することができ、そのことが不登校になることを未然に防止することができた。

課題

- ・別室指導支援員を確保すること。
- ・児童やその保護者に、体調や気持ちの浮き沈みがあるので細やかな対応を継続していくこと。

別室対応を生かした登校支援について

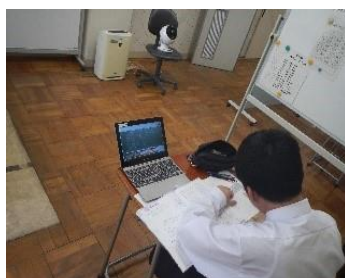
不登校生徒の状況

対象生徒は 1 年次後半より他生徒との関わりに苦手意識を感じ不登校になったが、担任の働きかけがあり 3 年次から登校している。教室には入れず別室にて同時刻にオンライン授業を受けたり、プリント学習に取り組んだりしている。

具体的な取組

○オンライン授業

別室を活用して所属学級の時間割に基づきオンライン授業を行っている。



○実技授業の支援

実技授業は、プリントでの学習や支援員と共に体操などを行う。

また、当該生徒は、話すことが好きなので、今の気持ちや今後どうしたいかなど担任や支援員と話す機会を設けている。

○支援内容の共有

支援員との別室内での会話内容はファイルを作成して担任や学年、S C と共有している。また、適宜 S C と面談している。

○別室内の配置の工夫

別室内は 3 つのブースに分かれておりヘッドホンを利用し、同時に異学年の生徒がリモート授業を受けられる工夫をしている。また、生徒が安心して過ごせるよう配慮を進め、クールダウンができる部屋としても活用している。



成果

3 年次になり学校が楽しい場所が変わってきている。今では教科をしぼって少しずつ教室に入りたいという希望をもつようになった。

また、他の生徒も、別室で気持ちが切り替えられ、次の授業を受けやすくなっている。

課題

今後、利用する生徒が増えた場合の教室の広さの確保、支援員の常駐が課題である。

校内別室について

不登校生徒の状況

対象生徒は、入学当初から友人関係をめぐるトラブルに関与することが多く、気持ちを落ち着かせる場所の一つとして校内別室を利用するようになった。別室でも時折トラブルに関与することがあったが、校内組織での検討と外部機関との連携を重ねて環境を調整し、現在は別室で落ち着いた毎日を過ごしている。

具体的な取組

○生活リズム構築の場として

午前中は学校から配信される授業を家庭で視聴し、学習している。家庭で昼食をとったあと登校し、職員室でファイルを受け取ってから校内別室に入室する。体調不良の日以外、ほぼ毎日同じ時間に登校している。ファイルには当該生徒が一日の記録をつけ、担任や学年の教員がコメント加えるようにしている。

○自己肯定感を保つ場として

入学後、毎日のように学級で対人トラブルを起こしていたが、校内別室では外的な刺激が少なく、居心地の良さに繋がっている。現在は利用者が少ない午後のみ登校し、創作活動や支援員との会話をし、トラブルを起こさないことが自己肯定感の維持につながっている。

○学びのサポート場所として

活動内容によって、円卓とブース机とを使い分け、創作活動と個人学習との両立を図っている。強化担当の教員とも連携を図り、学習支援を実施している。他の利用者が静かな場所での学習を希望した際に対応できるよう、支援員の目が届く隣室を常に確保している。

○社会性を育む場として

別室支援員として地域のお年寄りが多数在籍しており、その包容力が当該生徒に安心感を与えている。SC・SSWとも連携し、地域行事への参加を視野に入れた働きかけを行っている。



成果

当該生徒は、トラブルに関与していた時期は、自身への罪悪感から自傷とともとれる行為が見受けられたが、現在は外的刺激がほとんどないため、トラブルが起きることもなく、落ち着いて過ごせている。

課題

あくまで支援員配置であるため、学力の保障が十分にできないことや当該生徒用の対応になっていることが課題である。

校内別室の取組について

不登校児童の状況

対象児童は、小学校中学年の時から不登校傾向だった。特別支援教室を利用して、集団での学習への抵抗感が強かった。校内別室ができてから、オンラインによる健康観察をきっかけに学校とのつながりを増やしていき、卒業時には在籍学級で過ごし、必要に応じて別室を利用するようになった。

具体的な取組

○社会とつながる

タブレット端末を利用して、登校しない日でも学校とつながるようにした。一日のスケジュールを確認して生活リズムを整えたり、「家にあるものしりとり」などの簡単なゲームをしたりして、家族以外とつながれるようにした。

○心のエネルギーを貯める

校内別室では、安心できる場所とするため、取り組みたいことができるようにした。学習への意識よりも、校内別室が自分の居場所と感じられることを重視した。工作やボードゲームなど、支援員や異学年の児童と行うことも取り入れた。

○学習意欲の向上

校内別室が安心できる場となったころ、学習に向かえるようになった。学習時間を区切ったり、内容を選んだり、スモールステップで取り組めるようにした。学習内容を決めるために、担任とのやり取りも回数が増えていた。

○学習リズムを作る

在籍学級で授業を受ける、宿題をやってくる、校内別室を利用する場合は決めた課題を終えてから工作をするなど、学習のリズムが整うようにした。



成果

不登校児童の支援には、継続的なアセスメントに基づく支援体制の構築が欠かせないことが分かった。不登校児童への支援は長期にわたり、その間、SCやSSWを交えたアセスメント、支援の見直しを実施し、校内体制を強化することができた。

課題

校外ボランティアとの連携方法、何をどこまでお願いするのか、児童への働きかけ、教室の管理等、よりよい方法を検討していく。

校内別室の活用について

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校 2 年生である。小学校 5 年生の転校時より不登校の状況が継続していたが、現在は、校内別室登校ができるようになった。

令和 5 年度 3 学期からは週 3 日程度、令和 6 年度にはほぼ毎日校内別室に登校し、小学校の不登校状況から脱することができるようになった。

具体的な取組

○地域の人々の協力による別室運営

校内別室は、学校運営協議会委員を中心に地域の見守りボランティアの方々が常駐し、不登校傾向の生徒が登校した時に過ごしやすい環境になるように支援している。



○教育相談部会での情報共有

校内別室を利用する生徒についての情報は校内別室支援員、各学年教育相談担当、S C、特別支援コーディネーター、生活指導担当、養護教諭、管理職、特別支援教室専門員、学校運営協議会委員等を含む教育相談部会を毎週月曜日に開催し、共通理解を図っている。

○支援員と各学年教員との連携

校内別室では別室を利用する生徒が各自の状況に応じた過ごし方ができるように配慮している。個々の生徒の状況については、校内別室支援員と各学年の教育相談担当と情報交換を密に行い、適切な登校支援の具体策について随時相談して対応している。

○学校行事に保護者同伴で参加

S Cが当該生徒、保護者との関わりを大切にして、当該生徒の家庭での様子を把握し、情報を担任や別室支援員に伝えるようにしている。また、S Cの協力を得ながら体育祭、合唱祭等の学校行事を中心に保護者同伴での参観を促して在籍学級への復帰の機会となるように、配慮している。

成果

当該生徒は、在籍学級への登校はできていないが、別室には毎日登校し、地域のボランティアや校内別室支援員との会話を楽しむようになった。

課題

校内別室への登校はできるが、現段階では教室復帰の糸口が見つかっていない。

別室指導による初期対応について

不登校児童の状況

対象児童は、小学校 6 年生であり、5 年生までは、頑張って登校していたが、6 年生の 2 学期に体育学習発表会の練習をきっかけに教室に入れなくなった。

体育学習発表会が終わり、教室に戻ったが、1 か月ほどして再び友達関係をめぐる問題により、教室に入れなくなった。

具体的な取組

○養護教諭を要として、教室に戻ることを目指した支援

保健室に登校したら、養護教諭が付き添ってランドセルを教室に置きに行ったり、給食の食器を教室に戻しに行ったりして、教室復帰のスモールステップに取り組んだ。担任と養護教諭が相談し、徐々に付添いを無くしたり、参加できる授業を増やしたりしている。

○ＳＣとの相談

当該児童とのカウンセリングを通して、教室に入れない理由を引き出している。体育学習発表会の練習が辛い、友達との関係がこじれているなどの要因が明らかになった。報告を聞き、担任が練習の参加を減らしたり、席替えをしたりするなど迅速に対策をした。

○校内別室支援員との関わり

校内では他のボランティアと区別するためと、仕事内容がわかりやすいので「見守りボランティア」と呼んでいる。

児童の様子に応じて、話し相手になったり、学習の様子を離れた所から見守ったりしている。

○低学年児童との交流

校内別室が 1 年生の教室に近く、休み時間に 1 年生との交流が図られている。当該児童は、低学年との交流を好む傾向があり、自ら校内別室を出て話しかけたり、教室に戻るよう促したりすることで上級生としての実感をもつようになった。



成果

SOSを発信することができるようになった。必要な時に校内別室を利用し、エネルギーを蓄えることができたなら、教室に復帰するというサイクルを構築できた。

課題

教室に戻るタイミング等を適切に判断し、支援する校内別室支援員の育成が必要である。